

被爆 76 周年原水爆禁止世界大会 長崎大会 第 3 分科会

第 3 分科会では、高校生平和大使の取り組みを通じて、被爆体験や反核運動をどう継承していくのか・次世代に繋いでいくのかについて、考え合いました。

はじめに、熊本県高教組執行委員長の青木さんから、被爆二世としての生き方を選び取るとして、ご自身の父親との関係性、親の被爆体験を聞いたのは 23 歳であって、それまでは父親との関係性は良好なものとは言えなかったが、被爆体験について聞くことで、「出会い直し」という表現をもって、まったく関係性が異なったことについて、報告いただきました。

現在、私たちは、多くの被爆体験や二世の方の活動について聞くことのできる機会をもっています。その壮絶な体験は、まさに戦争で誰が犠牲になるのかを痛切に表わしており、原爆の非人道性・被爆の実相を知る貴重な機会とさせてもらっています。しかし、被爆者の方一人ひとりにとっては、本当はこのことは思い出したくない・触れたくない部分を振り返らなければならないことなのでしょう。この機会を与えてくれていることについて、改めて、その証言や言葉の重みをしっかり受け止め、伝えていかなければならないことを学ばせてもらいました。

また、青木さんからは、「誰でも継承活動の担い手になれる」という言葉もいただきました。私自身、広島や長崎からは遠く離れた四国の山のなかで、微力ではありますが反戦・反核運動に取り組んでいるつもりです。この言葉の重みをしっかり受け止め、活動していかなければならないと決意させられた思いです。

続いて、高校生平和大使の創設に深く関わられた平野さんから、被爆二世を実感した出来事についてや、ご自身の平和活動の軌跡について紹介いただきました。そのなかでは被爆二世としての課題だけではなく、いかにして被爆者の体験を二世が引き受けるべきなのか、また活動のなかで在外被爆者援護など、多くの課題に対してどう継承していけば良いのかのぶつかりについても報告されました。そして、その答えの一つとして、24 年前に高校生平和大使という取り組みの形に結び付いたこと、当初は批判も多かったり、受け止められ方も良くはなかったりしたものの、継続することで国際的な認知度が高まり、核廃絶への具体的な成果につながっていることも報告いただきました。

また、そのなかでは平和大使の取り組みから派生して、「高校生一万人署名活動」が取り組まれたり、コロナ禍にあっても新たな「ピースブックリレー」の取り組みが展開されたりするなど、若者の活動が現況を打破する力にもなるとの展望も示されました。

そして、第 23 代高校生平和大使のお二人からは、自分に何ができるのかとの自身への問いかけから、自分が声を挙げること・行動することが必要なのではないかと、活動へのきっかけが紹介されました。高校生平和大使として、自分たちの立場・役割はなにか、まったくの子どもでもないけど大人でもない、若者や同世代への発信が自分たちにできることではないかとの思いが話されました。

また、これまでの多くの人たちや先輩たちの積み重ねが今の自分につながっている・次は自分が後輩に良い影響を与えたいとの決意は、まさに私たちがどう次の世代に繋いでいくのかについての答えを示してくれた思いです。

原爆投下から 76 年が経過し、被爆者や二世の方の高齢化が進んでいます。原爆症認定の問題や被爆体験の継承などに残された時間は決して長くなく、私たちがその体験を直接聴くことのできる機会も、もうわずかしか残されていません。

しかし、被爆者の願いである「戦争反対」「核兵器廃絶」、核兵器の使用につながる道を歩むことを許さないという決意を、私たちが引き継ぎ、地域や世界にむけてアピールすることはこれからも可能であり、それこそが私たちの責任でもあることを明らかにすることのできた分科会の取り組みであったかと思えます。

以上、報告いたします。

運営委員／田口勇作（社青同）